

S 県障害者水泳協会における障害種別を越える活動 ——K 会長の取り組みを中心として

手賀 尚 紀

〔抄 録〕

筆者は、障害文化を研究テーマに S 県障害者水泳協会でフィールドワークを行っている。この水泳協会の特徴は、発足時は身体障害者の組織であったが、知的障害者や精神障害者にも門戸を開き、現在は障害種別に関わりない組織として活動していることである。しかし当初は、知的障害者等への偏見があり、受け入れには会員の多くが否定的であった。その後、K 会長の先導的取り組みにより門戸を開くことになるが、そのきっかけとなったのが知的障害者の E さんである。そこで、K 会長にインタビューを実施し、障害種別を越える組織となった経緯を聞き取りした。また K 会長が経験した話として、身体障害者の障害種別団体間においても対立的関係がうかがえた。

本稿では、この K 会長のインタビューで聞き取りした内容と、それに考察を加えて報告する。考察においては、障害者がもつ「背景」と、その背景をもった障害者の「目的」とが共通したところに障害種別を越える組織となり、活動が継続できている理由があるものと考えられた。また、この「背景」と「目的」を手がかりとして、障害種別を越えた障害文化の共通項を見いだせるのではないかと考えられた。

キーワード：障害種別 偏見 水泳 障害文化

1. はじめに —問題意識

本紀要第 11 号に筆者による研究ノート「障害文化の先行研究に関する一考察」が掲載されている。その中で障害文化の意義を 3 つ上げている。①障害の否定から肯定へと価値の転換をはかる可能性を秘めていること。②多文化の理解や共存等の理念に基づいて、共生社会への道筋を構築できる可能性をもっていること。そして③社会福祉の弱点を補うための手段としての可能性があること、である（手賀 2014: 105-6）¹⁾。したがって障害文化は、障害問題の解決に対して新たな視点を与える可能性をもつものと、筆者は考えている。

しかしながら、先行研究においては研究者らそれぞれの主張で終っており、決して障害文化とは何かということが明らかにされているとはいえない。そのようなそれぞれの主張において、一つの相違点と捉えられる主張（論点）があると思われる。それは、障害文化を障害種別それぞれの文化の総称と捉えるものと、一方、障害種別を越えて何らかの共通性に障害文化を見出そうとするものである。例えば倉本智明は、『『障害者文化』という一つの共通する文化が

あるわけではなく、そのなかには、盲人の文化やろう者の文化、知的障害者の文化や脊髄損傷の人の文化、脳性マヒの文化や自閉の文化といったものが含まれている」(倉本 2000:101)²⁾とし、障害文化を「複数存在する障害者の文化を総称する」(倉本 2000:100)³⁾ものとしている⁴⁾。一方、長瀬修は「障害種別の文化が存在したところで、それが共通の障害文化をただちに構成することにならない。」(長瀬 1998:209)⁵⁾としながらも、しかしながら障害文化には「ディスアビリティカルチャーというくくりの中にサブカルチャーとして種別の文化があるという構図が必要である。」(長瀬 1998:209)⁶⁾という。そして「障害の文化の場合、『正常』でないと思なされている身体、知的、精神状態を持ち、社会的不利にさらされていることが共通項である。」(長瀬 1998:209)⁷⁾とする。つまり長瀬のいう障害文化とは、障害種別を越えて障害者に共通した文化である。いずれにしても障害文化の研究には、障害種別間の関係あるいは状況等を明らかにすることは欠かせない考える。

そこで筆者は、S 県障害者水泳協会（以下「S 協会」という）をフィールドにして、会員へのインタビューや参与観察を行ってきた。この S 協会の最大の特徴は、障害種別を越えた活動である。しかし、発足当初から障害種別に関らない活動であったわけではない。そこには障害種別の壁を乗り越える取り組みがあった。本稿では、これまで先導的役割を果たしてきた K 会長へのインタビュー調査に基づき、K 会長の取り組みを中心として、障害種別を越えた組織となる経緯と、障害種別間の状況等について報告する。

2. S 県障害者水泳協会の概要

S 協会は地元の地方新聞⁸⁾に、その活動を紹介する記事が掲載される。記事の見出しは「『心のバリアー』を越えて 障害の種別克服し団結」である。そしてこの記事では、S 協会の発足当初は、身体障害者の組織であり、知的障害者には門戸を閉ざしていた。その理由は知的障害者に対する「心のバリアー」であったとし、知的障害者の E さんが入会する経緯を伝えている。そして、この記事の最後は「障害者同士の心のバリアフリーを一層広めていくことが、次のステップだ」という K 会長の言葉で締めくくられている。

この S 協会は 1997 年に正式に発足している。その前身は身体障害者のスキークラブで、シーズンオフのトレーニングとして水泳を行っていたことが発足のきっかけとなる。発足時の名称は「S 県身体障害者水泳協会」であったが、2004 年には、知的障害者の E さんが入会することにより、それまでの名称にあった身体障害者の「身体」を削除し、「S 県障害者水泳協会」へと名称変更する。

S 協会の目的は、「〇〇県内における、障害者の水泳に関する統一組織として、水泳の普及、振興を図り、水泳を楽しみながら機能の維持回復と潜在能力の向上を目指し、水泳を通じて障害者と健常者が相互にふれあい、理解しあい、障害者の社会参加に寄与すること」と会則に規定している。

運営は、総会および役員会で検討、決定され、組織的民主的に行われている。また、主な活動は、毎月2回の練習、年1回の会員による大会、忘年会やレクリエーション等の楽しみ会、そして全県・全国レベルの大会への出場等である。

会員数は2015年4月30日現在51名である（身体障害者17名、知的障害者16名、精神障害者1名、家族会員15名、その他2名）。

3. 調査の方法

(1) 質的調査

インタビュー調査を行う。インタビューは5回に分けて実施し、構造的・半構造的・非構造的インタビューを質問の目的に応じてそれぞれ用いる。

(2) 調査対象

S県障害者水泳協会のK会長、64歳（2015年12月1日現在）、男性。

(3) 調査の日時と場所

- ①インタビュー1:2010年9月15日・17:20～19:20・K会長の仕事場（自宅内）
- ②インタビュー2:2011年7月1日・16:40～17:40・K会長の仕事場（自宅内）
- ③インタビュー3:2011年12月2日・18:40～19:20・K会長の自宅へ電話で実施
（インタビュアーは自宅から）
- ④インタビュー4:2013年6月20日・17:20～18:20・K会長の仕事場（自宅内）
- ⑤インタビュー5:2015年12月5日・19:50～20:30・K会長の自宅へ電話で実施
（インタビュアーは自宅から）

(4) インタビューガイドと形式

①インタビュー1

非構造的インタビューとする。現段階では状況をほとんど把握できていないためである。そこで次のアとイについて明らかにすることを目的とし、K会長の話しに即して質問を行う。

ア. 知的障害者Eさんが入会するまでの経緯について

イ. 障害種別間の偏見や差別について

②インタビュー2

非構造的インタビューとする。現段階では状況をほとんど把握できていないためである。そして次のアについて明らかにすることを目的とし、K会長の話しに即して質問を行う。

ア. これまでの障害者団体での活動について

③インタビュー 3

半構造的インタビューとする。インタビュー 1 と 2 の追加として次のア～エの質問を準備し、そこで付随した話しがある場合、それに即して質問を加える。

- ア. はじめて入会した障害者団体はどこか。
- イ. 障害者団体でどのような活動や役割をしてきたか。
- ウ. 障害種別団体間の対立等、どんな場面や場所であったのか。
- エ. 現在、どういう団体に入会しているか。

④インタビュー 4

半構造的インタビューとする。S 協会との関わりと障害をもつがゆえの背景を知るための次のア～オの質問を準備し、そこで付随した話しがある場合、それに即して質問を加える。

- ア. S 協会で活動している目的は何か。
- イ. 障害者の水泳団体に入会した理由は何か。
- ウ. S 協会のよいところはどういうところか。
- エ. 練習や活動中に一般（健常者）からの偏見や差別を感じることはあるか。
- オ. 日常生活で偏見や不自由はあるか。ある場合はどのようなことか。

⑤インタビュー 5

構造的インタビューとする。次のア～カの質問事項を確認するために行う。

- ア. 家族会員の制度は、いつできたか。
- イ. 家族会員は、知的障害者に限ったものか。
- ウ. 知的障害者の場合、必ず家族会員が必要か。
- エ. 知的障害者を受け入れたときに入会を役員会で決定することになったが、それは知的障害者に限ったものか。
- オ. これまで入会を希望して、入会を断ったことはあるか。
- カ. K 会長は現在何歳か。

(5) 倫理的配慮

インタビューの目的を説明する。またデータについては目的以外に使用しないことを伝える。

答えたくない質問には、答える必要がないことを伝える。

録音機使用については許可を得るとともに、使用後は消去することを伝える。

4. K 会長について

K 会長は 34 歳の時に脊髄損傷にて下半身不随となり、車いすの使用となる。障害を負い在宅生活が半年ほど経過したころより、バリアフリーへの改修が必要と思うようになる。そこ

で、K 会長がリハビリを行っていた病院の看護師の自宅を参考に見に行くことになる。看護師の夫も脊髄損傷を負っていた。この夫より県の車いすの団体に誘われ入会することになる。それまでは障害者団体の存在も知らなかったが、その後、K 会長は障害者団体の活動を通して、多くの障害者との関わりをもつことになる。車いすの団体では役員等も務め、また、それ以外でも車いすバスケットボールや車いすテニス等に取り組む。更には全国身体障害者スポーツ大会の陸上 100 m 走にレーサー用車いすで出場したりもする。しかし K 会長は、しっくりこなかったという。それは常に車いすの座位の姿勢から解放されることがなかったからである。

そのような中、水泳への誘いを受けることになる。しかし当初 K 会長は、その誘いを断る。仕事も忙しく、バスケットやテニスも続けていたので、水泳までもやろうとは思わなかった。その後も何回か誘いを受けるうちにやってみようとの思いになる。子どもの頃は川で泳いでいたので、泳ぐことはできると思ったし、何より水泳はリハビリによいと聞いていたので、リハビリを兼ねるつもりでもあった。そして K 会長は水泳に喜びを見つけることになる。その思いを次のように語っている。

「車いすから解放されるという解放感。移動もスイスイできる。そこに強烈な喜びを見つけました。私には絶対に水泳が合っている。そこから水泳が始まったのです。」

「プールに入ったのですよ。入ったら楽しくて、もうリハビリということも忘れてしまった。何が楽しかったかという、初めは泳げなかった。子どもの頃あれぐらい泳げていた自分が、なにこれと思うほど泳げなかった。何故かという、身体が立ってしまって横にならない。足がぶらんと下がって、いくら手で漕いでも沈むだけなのです。下半身が重くて。いくら浅くても足で立てないから死ぬ思いでした。だからプールサイドにつかまらなくてはならない。そして、少し泳いではつかまって、少し泳いではつかまってという具合でした。それが3ヶ月、半年とやっているにしたがってレベルが上がっていくのです。どんどん泳げるようになる。10 m から 25 m、25 m から 50 m と泳げるようになる。そうすると楽しくなる。やればやれるのだという思いになる。」

このようなことから K 会長と S 協会との関わりが始まることになる。一方、K 会長は閉鎖的な運営等の理由により、車いすの団体等からは退会して距離をおくようになる。

5. 知的障害者を受け入れる経緯

(1) K 会長の思い

K 会長は、身体障害者の水泳協会（スイミングクラブ）であった S 協会を、障害種別を越えた組織にしたいと思っていた。入会して一会員であったころ、会員の泳ぎを見ていて感動したという。視覚や聴覚の障害や、手足を損失している人もいる。いろんな障害をもつ人たちが、どのように泳いでいるのかを潜って見たりすると、それぞれの泳ぎから学べるのがたく

さんあり、「すごいなあ、素晴らしいなあ」との思いになる。そして、この S 協会を「身体障害者だけにこだわらないで、もっと広げた方がおもしろいと思った。いろんな障害の人が入ったらおもしろくなるだろうと思った。」と語る。

そこで K 会長（当時は副会長になった頃）は、当時の会長に対して身体障害者以外の障害者も入会できるよう提言する。しかしそれは受け入れられない。当時はまだ身体障害者のスキークラブとの関係（S 協会の前身はスキークラブ）があったために、知的障害者等の受け入れには難しい環境でもあった。

(2) E さんとの出会い

当時 E さんは、全国障害者スポーツ大会の知的障害者部門に選出されていた。ある日 E さんが、S 協会の練習会場でもある県立プールの隅で一人泳いでいた。同じく全国大会に選出されていた S 協会副会長（当時）が、その場で偶然に一緒になった E さんを「この人も全国大会にいくのだよ」と K 会長に紹介してくれる。K 会長は、E さんにあいさつをしてから一緒に泳ぐことにする。その後、E さんはプール（練習）で会う度ごとにあいさつをしてくれるようになる。

(3) 総会での却下

K 会長は E さんと出会ったことで、障害種別を越える取り組みを具体化していくことにする。そこで、さっそく次の総会に、S 県身体障害者水泳協会の名称から「身体」の文字を削除して「S 県障害者水泳協会」とし、障害種別に関わりなく入会できるようにすることを議案とする。しかしその結果は、賛成がほとんどなく却下される。反対の理由として知的障害者に対する次のような話しが出される。

「怖い」「子どもの時に髪を引っ張られたことがある」「E さんは良いがいろいろな障害の人がいる」「一人入ったらと次々に入会してくるのではないか」、また多くの会員からは「知的障害者の行動が分からず不安である」との話しである。

そして、K 会長に対抗するグループもできることになる。

(4) 会員の理解への取り組み

しかし「次の総会では、私はぜひ成立させたいと思っていました。」と語るように、K 会長は次に向けて行動に移す。

まず、反対するグループの中心である会員に、個人的に会ったり電話したり、また練習会の時を利用して反対の理由を聞き、そして説明を繰り返して行う。また、このような話し合いを行うなかで、E さんを強引に友情会員として練習会に参加させることにする。E さんの母親は迷惑をかけるのではないかと申し訳なさそうであったが、母親からも E さんを強引に借り

るような感じで、S協会の練習で泳いでもらうことになる。そのような中、Eさんに対する理解は得られるようになる。K会長は次のように語る。

「徐々に徐々に会員みんなの気持ちも解けてきました。Eさんの性格とか人柄もあったと思います。あのようにあいさつもしっかりしていますね。最初にEさんだったから理解を得られたと思えるところもあります。そういう意味では、Eさんは非常に大きな役割をしてくれたと思います。」

(5) 総会での承認

前回却下されてから1年が経過した総会においては、協会の名称変更も承認され「S県障害者水泳協会」となり、これに伴って障害種別に関わりなく入会できるようになる。ただし入会にあたっては条件つきでの提案であった。その条件とは、役員会で入会希望者の状況を確認して決定する。その決定をもって入会申込書を送るといった手順を踏むことである⁹⁾。また、家族会員の制度¹⁰⁾を設けて、必要に応じて両親等に付き添いをしてもらえるようにする。このような条件のもとに総会での承認となる。

しかし、この総会でも会員全員の賛成ではなく反対もあった。その時の反対の理由も「Eさんよりもっと知的障害の重い人がきたらどうするのか。どのように対応していくのか。誰が対応するのか」というような内容であった。

6. 障害種別の対立

K会長は、身体障害者団体等での体験をとおして、「障害者同士であっても理解はないし、理解をしようとしめない。障害種別間での利害の対立みたいなものもあります。」という。そして、次のような事例を紹介する。

点字ブロックの上を車いすで通るとガタガタする。障害によってはその響きで身体にビリビリとした痺れを感じる車いすの人もいる。そうすると点字ブロックはやめてもらいたいという話しになる。また、視覚障害者からは車いすが邪魔でぶつかると危ないという話しをされる。聴覚障害者とは、筆談やメールなどでコミュニケーションをとっていても、込み入った話しになると、文章でのやりとりはたいへんになってくる。そして歩み寄れなくなってしまう。障害種別の団体の代表が定期的に会合を開いているが、結局その後は各障害種別に分れて、その中でお互いの陰口になってしまう。K会長はこのような障害種別間の状況を「利害の対立」と表現する。そして「利害が対立する原因は、ふれあいが無いからです。心（こころ）から、心（しん）からのふれあいが無いからです。お互いにそれを求めない。」という。

そのような背景には同じ障害種別の団結が強いということも考えられるが、同じ障害種別の関係についてK会長は「私なりの分析」と付け加えて、次のような話しをする。

「例えば私は下半身がマヒしているから、排泄の感覚がありません。もし排泄に失敗したら、

臭いなど周囲に迷惑をかけるのですごく不安な気持ちになります。羞恥心もあります。車いすの同じ仲間だったら理解をしていますし、そこに羞恥心はないのです。だから居心地がいいのです。これは視覚障害の人も同じようなことがあると思います。目が見えないための失敗があります。他の人が笑うことであっても、仲間は笑ったり、それをさげすんだりしません。このような経験がない人から笑われたり、さげすまれたりすることの恐怖とか、不安とか、恥ずかしさということがあります。〔だから同じ障害種別の人は〕同じ傷をもった、同じ悩みをもった、同じ痛みをもった、一番の理解者なわけです。〕（〔 〕は筆者補足、以下同じ）そして S 協会の例をあげて「こういうこと〔障害種別へのこだわりや障害種別間の対立等〕は、みんな〔いろいろな障害の人〕が集まって同じプールに入って泳いで、夜は一緒にごはんを食べて、お酒を飲んだりすると無くなるの」といい、既存の障害種別の組織のあり方では、これまでと同様の状況が続くだろうと指摘する。

そこで K 会長は、「極論をいえば、それ〔団体などの障害種別の名称〕を撤廃しなければならない。無くさなければなりません。そして〔障害種別に関わりなく〕本当にみんなが集まって一つのものを行うようなことが出来ればよいと思うのです。」と話し、その一つの方法として、地域の障害者が障害種別に関わりない活動を地域からつくっていく必要性を説いている。

7. 考察

障害種別間の偏見等については、これまでも幾つかの研究や言及がある。例えば杉野昭博は「障害種別の異なる人同士の間には、健常者と障害者との間にある差別や偏見に優るとも劣らない無理解が存在する」（杉野 1999:5）¹¹⁾という。また廣野俊輔は、日本脳性マヒ者協会青い芝の会連合会の会報「青い芝」における知的障害者に関する言説を検討し、1960 年中頃まで知的障害者と同一されることに反発を覚えていたが、1960 年代後半より連帯すべき相手としてみなす言説が生まれてきたという。そして、この言説の変化に対して廣野は「知的障害者は同じく社会的な差別や偏見を受けている者として、連帯の対象となったのだと考えられる。」（廣野 2007）¹²⁾としている（廣野 2007）¹³⁾。

同様に S 協会では、会員である身体障害者の多くが、知的障害者に対して怖い、行動が分からないから不安等の偏見をもっていた。そして E さんの入会をきっかけに、その後、知的障害者の会員が増えていく。また会話が困難であったり、時にパニックになる障害が重い知的障害の会員も現在では入会している。しかし、知的障害者の入会が理由で退会した身体障害者の会員は一人もいないと、K 会長の話しである。

筆者の参与観察¹⁴⁾においても、プールから上がろうとする身体障害者のために、知的障害者が車いすをプールサイドに準備し、身体障害者が知的障害者に声をかけて励まし、知的障害者が車いすを押してともに移動したりする。また、聴覚障害者と知的障害者が身振り手振りで会話をしたりすること等、このような様子は日常的にみられる。総会でも知的障害の会員が描い

た絵が資料の表紙に使用され、発言がレクレーションの企画に採用されたりしている。精神障害の会員は現在1名であるが、障害種別としての隔たりはうかがえない。

S協会に知的障害者が受け入れられてきた理由の一つに親の関わりがある、とK会長はいう¹⁵⁾。S協会を見ていると、知的障害者の両親等が家族会員として入会し、運営に携わり、一緒に水泳を楽しみ、身体障害者の会員と実によい関係が築かれている。さらに障害種別を越えた活動がされている理由には、それぞれが障害による何らかの不利益を背負いながらも泳ぎたいという「不利益」と「水泳」という2つの共通性が一致しているからであると思われる。

一方、K会長によると、所属していた車いすの団体を通して、身体障害者の障害種別の団体では対立的関係がうかがえた。その原因についてK会長は、同じ障害種別の障害者は、共通の悩みや痛みをもつよい理解者があり、したがって結び付きが強くなるという。結び付きが強固な分、閉鎖的となり、他の団体とも対立的になっていきやすいとも考えられる。

ところで障害文化においては、先述のとおり各障害種別の文化の総称ととらえるか、障害種別を越えた共通項に見いだすか、という論点があった。K会長がいうように各障害種別は強固に結びつきやすい背景があり、そのような意味では必然的に障害種別の文化が成立してきたと考えられる。それでは障害種別間に共通項を見いだすことはできないのだろうか。S協会は障害による「不利益」と、「水泳」の共通性が障害種別を越える理由の一つと思われたが、不利益を「背景」、水泳を「目的」と言い換えるならば、障害者がもつ「背景」と、その背景をもった障害者の「目的」を手がかりに、障害種別を越えた障害文化の共通項を見いだせるのではないかと考える。

8. むすびにかえて

筆者は身体障害者の水泳協会から出発し、その後、知的障害や精神障害等の障害者にも門戸を開いて活動しているS協会をフィールドに調査研究を行っている。当初は障害種別間の偏見や差別が研究のテーマとしていたが、S協会と関わる中で「文化」という言葉が頭に浮かんできた。それは上下肢マヒや欠損、視覚や聴覚の障害、知的や精神の障害等、障害種別に関わりなく、このプールに集い、それぞれの障害に応じた泳ぎを追求し、そして楽しんでいる様子が、同じプールで泳いでいるいわゆる健常者とは、また別の価値観や意義等がS協会にあるように感じられた。そこから筆者の関心は障害を文化の視点から研究することに移り、会員のインタビューや参与観察を進めてきたところである。

そこで本稿では、これまでK会長に行ったインタビュー結果の中から、障害種別を越えた組織になる経緯や、障害種別に関する内容について報告した。そこでは障害種別間の偏見あるいは対立的な状況も確認されたが、それを乗り越えて一緒に活動できることも示されている。

また障害文化とは何か、あるいはその意義や実践への応用等を明らかにしていくためには、障害者の世界、コミュニティはどのようなものなのかを明らかにすることが必要と考える。その

ためにも障害種別を越えて活動している S 協会でのフィールドワークを続けていきたいと考えている。

注・引用文献

- 1) 手賀尚紀 (2014)「障害文化の先行研究に関する一考察」『福祉教育開発センター紀要』11, 佛教大学福祉教育開発センター, 97-108.
- 2) 倉本智明 (2000)「第 6 章 障害学と文化の視点」倉本智明・長瀬修 編著『障害学を語る』エンパワメント研究所, 90-119.
- 3) 倉本智明 (2000) 前掲書.
- 4) 倉本は「もしかすると将来, 多様に存在する障害者文化のなかに, ある共通項を見いだすことになるのかもしれない」(倉本 2000:102)とも述べており, 主張に含みをもたせている. 倉本智明 (2000) 前掲書.
- 5) 長瀬修 (1998)「障害の文化, 障害のコミュニティ」『現代思想』26(2), 204-15.
- 6) 長瀬修 (1998) 前掲書.
- 7) 長瀬修 (1998) 前掲書.
- 8) 調査対象が特定されるため, 新聞名や発行年月日は明示しない.
- 9) 入会を役員会で決定することについては, 知的障害者に限ったものではなく, 入会希望者に対してすべてである.
- 10) 知的障害者に必ず家族会員と付き添いを求めるものではない.
- 11) 杉野昭博 (1999)「障害者福祉改革と権利保障」『社会福祉学』39(2), 社会福祉学会, 1-14.
- 12) 廣野俊輔 (2007)「『青い芝の会』における知的障害者に関する言説の検討—会報『青い芝』を手がかりに—」. 障害学会ホーム>障害学会第 4 回大会詳細>ポスターによる報告 (18 報告) <http://www.arsvi.com/2000/0709hs01.htm> (最終アクセス日 2015 年 12 月 3 日).
- 13) 廣野俊輔 (2007) 前掲ウェブサイト (最終アクセス日 2015 年 12 月 3 日).
- 14) 筆者は 2009 年 8 月 1 日から参与観察を継続して行っている.
- 15) K 会長によると, 全国的に見て身体障害者と知的障害者が一緒に活動する水泳クラブは幾つかあったが, 知的障害者の親と身体障害者の関係がうまくいかないことが理由で, 結局分れるところが多くあったとのこと. また, このような前例があるために障害種別を越える活動が広がらなかったという.

参考資料

〇〇県障害者水泳協会 会則

第1章 総 則

第1条 本会の名称は、〇〇県障害者水泳協会（愛称、〇〇〇スイミングクラブ）とする。

第2条 本会の事務所は、会長の定めるところに置く。

第2章 目的及び事業

第3条 本会は、〇〇県内における、障害者の水泳に関する統一組織として、水泳の普及、振興を図り、水泳を楽しみながら機能の維持回復と潜在能力の向上を目指し、水泳を通じて障害者と健常者が相互にふれあい、理解しあい、障害者の社会参加に寄与することを目的とする。

第4条 本会は、前条の目的を達成するために、次の各号に掲げる事業を行う。

1. 〇〇県障害者水泳協会大会（〇〇〇スイミングクラブ大会）を開催すること。
2. 障害者の水泳の普及、指導に関すること。
3. その他、本会の目的達成に必要な事業を行うこと。

第3章 組 織

第5条 本会は、本会の目的の趣旨に賛同した障害者および役員会において入会が認められた者を会員とする。

- 2 活動するにあたって、未成年者および介護等、付き添いが必要と認められた者は保護者の同伴を求める。

第6条 本会の登録は、年度ごとに行うものとする。

第7条 前条の登録にあたっては、次の書類を提出するものとする。

1. 障害者手帳、または療育手帳を所持している場合は、その写し。
2. 当会所定の登録申込書。
3. その他、必要とされるもの。

第4章 機 関

第8条 本会には、次の役員を置く。

会長・副会長・事務局長・会計担当・幹事若干名

第9条 会長、副会長、事務局長、会計担当、幹事および会計監事は総会で選任し承認する。

第10条 役員の任務は次のとおりとする。

1. 会長は会を代表し、会の運営にあたる。
2. 副会長は会長を助け、会長に事故ある時はその職務を代行する。
3. 事務局長は会全般の庶務を担当する。
4. 会計担当は会の経理を担当する。
5. 幹事は、会の運営・事業に携わる。

第11条 役員の任期は、1 年とする。但し再任は妨げない。欠員を補充した役員の任期は前役員の残任期間とする。

第5章 会 計

第12条 本会の経費は会費、その他の収入をもってあてる。

第13条 会費は次のとおりとし、年度ごとに納入するものとする。

1. 年額 個人会員 3,000 円。但し、家族で入会の場合は一括 4,000 円。
2. 途中入会の場合は、個人会員は月 250 円、家族会員は月 350 円とする。
3. 納入は、会指定の金融機関の口座への振り込み又は現金の支払いにより行う。

第14条 本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日で終わる。

第6章 会 議

第15条 本会の議決機関を総会及び役員会とし、会長は年一回の総会を招集する。但し、必要に応じて臨時総会を招集することができる。

第16条 総会は、会員の過半数をもって成立する。

第17条 総会に付議すべき事項は次のとおりとする。

1. 予算の議決、決算の承認。
2. 会の事業に関すること。
3. 役員の選任及び承認。
4. 規約の改廃。
5. コーチ、ボランティアに関すること。
6. その他重要な事項。

第18条 役員会は総会に次ぐ議決機関であり、必要ある時は会長が招集する。

第19条 役員会に付議すべき事項は次のとおりとする。

1. 新規入会者について。
2. 予算、決算の審議。
3. 事業の審議。
4. 総会に付議すべき事項。
5. 総会で委任された事項の決議。
6. その他重要な事項。

(てが なおき 福祉教育開発センター非常勤講師)